

入選

笑顔の花が咲いている、きっと今も

鹿児島県 鹿児島大学教育学部附属中学校

1年 徳田 妃

「いや、いいのよ。ありがとう。」

市電に乗るとき、いつもこの言葉とあの笑顔が脳裏のうりに浮かぶ。私は市電で登校している。市電は多くの人を利用するので、いつも混んでいる。そんな中で、子どもやお年寄りの方が席に座れずにいるのを見たことがあるが、私はあるできごとを体験するまで、親切にはしたいけど声をかける勇気がなく、行動に移すことができなかった。

ある日、市電で外国の方に席を譲ってもらった。重たい荷物を持ち、柱をにぎって立っていると、目の前に座っていた男性が急に立ち上がり、「ヘイ、ガール。プリーズシットダウン。」と手招きし、私に席を譲ってくれた。

その人の荷物も大きく重そうなのに、その親切が嬉しく、私は自然と笑顔になった。「センキュー。」と覚えたばかりの英語と、笑顔で、精一杯の感謝を伝えた。そして、人を気遣う心は世界共通なのだと改めて思った。途中で降車したその人の背中からは、どんな人にも親切にできるかっこよさを感じた。

それからしばらくたったある日、市電がとても混んでいた。私が座っている前に、一人のお婆さんが立っている。私は、外国の方にしてもらった親切を、今度は私がする番だと思った。だが、ドクドクとなぜか急に心拍が速くなるのが分かる。高まる緊張。声をかけなくても、ほかの人が席を譲るかもしれない。

でも私がしなくて、誰がするのか。譲るか譲らないか、頭の中で起きる葛藤かっとう。いろんな意見が駆け巡る。だが、自分の恥ずかしさで声をかけずにいるよりも、お婆さんが席に座れる方が絶対いい。決めた。勇気を奮い起こし、「あの、席に座りませんか。」と声をかけた。聞こえているのか、どんな顔をされるのか、分からない。

長く感じる、返事が来るまでの時間の中で、心拍がもっと速くなる気がした。「いや、いいのよ。ありがとう。」と声が返ってきた。お婆さんの温かい笑顔と優しい声。私は、自分の気持ちがお婆さんに伝わったことに安心した。お婆さんは続けて、「あなたは優しいわね。その良さを大事にしてね。」と言ってくれた。私は、自分から行動できたこと、お婆さんが笑顔になってくれたことの嬉しさ、喜びでとてもいい気持ちになった。

自分の親切な行動で誰かが笑顔になってくれると、誰かが親切な行動を自分にしてくれると、嬉しくて笑顔になる。親切は笑顔の花を咲かせる魔法だ。

私は、いつでも、どんな人にも勇気を出し、親切である人になりたい。いつか、世界中を笑顔の花でいっぱいになりたい。と思っている。

あなたの考える親切とは、どのようなものですか。